

資料渉猟余話

その1

地域の貴重な資料が急速に忘れ去られていく昨今、峡谷に遺された先人たちの足跡をたどる仕事をしていると、たとえば薄汚れた紙切れ一枚の背後にも、有名無名、多くの人々の累々とした営みが潜んでいるのを感じる。先年、仲間と『伊那谷の文学碑』を出版し、また文化財関連の調査をしていると、この地域の奥深い文化と歴史の諸相に接し、その度に、忘却された事柄の、あまりに多いことに気づかされ、驚かされるのである。

翻って、物の価値の変貌激しい近現代にあ

っては、先人のせつかく遺してくれた文物も、その意味の消失とともに忘却される運命にあることも、また致し方ないことであるう。

郷土の人と資料との巡り会い

吉澤 健

しかし、あまりにも無慮に物が捨てられる時代になった。それらは本来自分たちの拠って立つ足元の土ではないか——。はなはだしきは、文字や写真として遺されていた、意味のあるはずの文物がゴミ集積場や資源回収

置き場に持ち込まれる昨今である。

冊子や本・写真ばかりではないが、それらの物は、必要とされた意味があつたはずであり、その意味が断ち切れた時にゴミに変わったのである。そこで、その意味を復活させ、分断されていた「物」

社団法人南信州地域資料センターには多くの

人から、忘れられたり、放棄されていた本や写真、書画が寄贈された。それらも一点では点だが、集まると線から面をなし、時代状況を

そこに価値を見いだした仲間で、この地域で活躍した近代以降一万人規模の「文化関係人物事典」を編もうと既に七年越しでカードをつくっている。その

や「人」が溜まってきたので、「南信州」の紙面をお借りして、あまり顧みられなくなった物の中から拾い出した、古くて新しい物を、仲間と一緒に少しずつ紹介していこうと思



蔵での整理・搬出作業風景

や「人」を繋げていくことで、消えかけた存在の意味を取り戻すことができるのではないか——。

そう思っていたのは私どもばかりではないらしく、「捨てないで！」を合い言葉に四年前に立ち上げた公益

浮き上がらせる。その集積の中で、当時その「物」が存在した意味を取り戻すとともに、現代を生きる私どもにとって新しい意味を付与してくれるのであ

調査研究の過程で浮かび上がってきたカードに盛れない「人」と「物」、そして郷土に繋がる逸話等が、たくさん発掘された。そうした資料「物」

う。もとより体系的に整理したものではないので、時代はあちこちすると思うが、見慣れたこの地域の景物が何かひとつでも違って見えたら幸甚である。